

★ スパース解法 — 貪欲法 —

次のような ℓ_0 最小化問題の解き方を考えよう。

$$\min_{\mathbf{x}} \|\mathbf{x}\|_0 \quad \text{subject to} \quad \mathbf{Ax} = \mathbf{b}. \quad (33)$$

貪欲法¹⁴ (greedy algorithm) とは何か？おつりを作る作業を思い出そう。なるべく少ない枚数のコインで 623 円をどのように作るか？内輪で残額に最も近い額のコインを選ぶことを繰り返せばよい¹⁵。

線形結合 $\mathbf{b} = x_1 \mathbf{a}^{(1)} + \cdots + x_n \mathbf{a}^{(n)}$ を思い出そう。基底ベクトル $\mathbf{a}^{(j)}$ はコインである。金額 \mathbf{b} を作るために使うコイン $\mathbf{a}^{(j)}$ の係数 x_j だけ非ゼロにする。選んだコインを表す非ゼロ係数の番号（添え字）の集合を T とする。なるべく少ない枚数のコインで金額 \mathbf{b} を作ろう。残額 $\mathbf{r} = \mathbf{b} - \mathbf{Ax}$ に最も似ているコイン $\mathbf{a}^{(s)}$ を選び、残額が最も減るように非ゼロ成分の $\mathbf{x}_{T \cup \{s\}}$ を最小二乗法で更新すればよい。

OMP

OMP (orthogonal matching pursuit) [1, 2, 3] は、アルゴリズム 1 のようにスパース解を求める貪欲法である。

アルゴリズム 1 Orthogonal matching pursuit: $\mathbf{x} = \text{OMP}(\mathbf{b}, \mathbf{A}, k, \delta)$

入力: \mathbf{b} : m 次元ベクトル, \mathbf{A} : $m \times n$ 行列, k : 非ゼロ成分の最大個数, δ : 許容誤差;

出力: \mathbf{x} : k スパースな n 次元ベクトル;

```

1   $\mathbf{x} := \mathbf{0} \in \mathbb{R}^n$ ;
2  台の初期値を  $T := \emptyset$  (空集合) とする;
3   $\mathbf{r} := \mathbf{b}$ ;
4  while  $|T| \leq k$  かつ  $\|\mathbf{r}\|_2 / \|\mathbf{b}\|_2 > \delta$  do
5    各基底と残差の類似度  $\mathbf{c} := \mathbf{A}^\top \mathbf{r}$  を計算する;
6    最も類似している列の番号  $s := \arg \max_j |c_j|$  を見つける;
7     $T := T \cup \{s\}$  として  $s$  を台に加える;
8    台  $T$  で示された非ゼロ成分を  $\mathbf{x}_T := \arg \min_{\mathbf{z} \in \mathbb{R}^{|T|}} \|\mathbf{b} - \mathbf{A}_T \mathbf{z}\|_2^2$  のように最小二乗解で更新する。
9    残差  $\mathbf{r} := \mathbf{b} - \mathbf{Ax}$  を計算する;
10 end while
```

貪欲法は、ゼロベクトルを解 \mathbf{x} の初期値とし、残差が十分に小さくなる (\mathbf{Ax} が十分に \mathbf{b} の近似になる) まで \mathbf{x} の非ゼロ成分を次々と見つけるアルゴリズムになっている。よって、非ゼロ成分の個数程度の反復回数で解が得られる。各反復において最も計算量が大きい手続きは、ステップ 5 の類似度計算 ($\mathcal{O}(mn)$) と、ステップ 8 の最小二乗解 \mathbf{x}_T の計算である¹⁶。最小二乗法の手間数は $\mathcal{O}(m|T|^2)$ なので、 $k^2 \ll n$ ならば OMP の手間数は $\mathcal{O}(mk^3)$ と見積もられる。

¹⁴ 欲張り法ともいう。

¹⁵ 用意されているコインが 1, 5, 10, 50, 100, 500 円玉ならば必ず最適解が得られる。しかし、貪欲法はどんなコインの組合せ問題も解けるわけではない。例えば、もし 1, 6, 13 円玉の 3 種類だとしたら、18 円を 3 枚の 6 円玉で作れるのに、貪欲法では 1 枚の 13 円玉と 5 枚の 1 円玉の計 6 枚が選ばれる。

¹⁶ この最小二乗解は $\mathbf{x}_T = (\mathbf{A}_T^\top \mathbf{A}_T)^{-1} \mathbf{A}_T^\top \mathbf{b}$ と書ける。これを右から順に直接に計算する方法の他に、 \mathbf{A}_T の特異値分解を利用する方法、連立方程式 $\mathbf{A}_T^\top \mathbf{A}_T \mathbf{x}_T = \mathbf{A}_T^\top \mathbf{b}$ を共役勾配法で解く方法などがある。